



**鴻
文
会
会
報**

第 6 号
発行・鴻文会
733 山口市吉田1677-1
山口大学人文学部内
電話(0839)22-6111
(内線) 808
郵便振替口座
下関0-15902

ご 挨拶

人文学部長 八木 充

『鴻文会会報』第六号の発行にあたって、紙面をおかりし人文学部の現状や展望について、会員の皆さんにご報告いたします。

私どもの人文学部は、昭和五十三年文理学部を改組し、人文学科と語学文学科、二十一年学科目（現在講座）、入学定員百八十名で発足しました。日本思想史学、美学・美術史、考古学、社会心理学、社会人類学、フランス語学・フランス文学、言語学などの学問分野が新設となり、人文系学部としての研究・教育体制を整備、拡充してきました。その後、数年間にわたる学部の努力が実って、六十年、大学院人文科学研究科（修士課程、入学定員八名）が設置され、明春第一回の修了生を送り出すことになっています。四十三名の教官は、学界の各領域の第一線で活躍する充実したスタッフを構成し、本学の内外を問わず他とけつして遜色ない陣容といえましょう。大学院の教育とあわせて、学部内に「学問の気風」が、いちだんともりあがっている思いがいたします。本年度の在籍学生は、学部七百六十四名、大学院二十二名であります。

六十二年度から入学者選抜方法を改善して、共通一次試験は国語・社会・数学・外国語の四教科受験とし、二次試験にあらたに小論文を加えることとなりました。四年間の学習をつうじて、個性をのばし、自分と自分の思想をつくり出してゆく学生を、少しでも多く受け入れようとするためです。また高校生の急増にともない、本年度以降、入学定員を十名増の百九十名としました。さらに十八歳人口の急激な増減——六十一年は百八十五万、六十七年、ピークの二百五十万にたっし、その十年後の二十一世紀はじめには、最多期の三十パーセント減という変動曲線が確実に見通せる状況にあります。

社会事情のこうした変化に対応するだけでなく、これからの学部の教育・研究をどのように主体的・体系的に組立てていくかを、長期的な将来構想のなかで、検討し具体化する必要に迫られているといわなくてはなりません。高等教育における人文学部の役割と責任を文系基礎科学の中核学部として位置づけ、清新・高明で特色ある学部づくりを目指そうとしているところです。

「文理」以来の卒業生、つまり鴻文会の会員は、この三月で二千六百名をこえ、各界・各地域で大いに活躍されていることは、ご同慶の至りです。各位のいっそうのご発展とご支援をねがっております。

（国史学・文理第二回卒）

私の中の山大・山口

プロの感覚

新見 裕

(西洋史学・文理第八回卒)

史学とは全く縁のない仕事について人文文学部の卒業生としての面子に傷つけない様、日夜がんばっています。

趣味はゴルフだが、これ又、誠に下手で一向に上達しない。

仕事の関係でよくゴルフをするが、やはり季節として春か秋が最高だ。あの芝生の目にしみる色、山あい木々の風景等ブレイのまぶさを除けば心が洗われる想である。ドライバード打った白球がナイスショットでよく飛んだ時などはゴルフの醍醐味そのものである。学生時代アーノルド・トインビーの歴史哲学が好きで彼の書をよく読んだが、今では、同じアーノルドでもプロゴルファーのアーノルド・パーマーとかジャック・ニクラスファンである。彼等の言葉の中で、「1%の可能性へ挑戦」というのがある。まさにプロ中のプロの名言だと感心している次第である。ボールが深いラフに入ってピンに向って打てない事が大事な場面で往々にしてよくある。その時彼等は1%でもリカバリーの可能性があれば挑戦するプロとしての意識を持っている。

プロと云えば、スポーツに限定される言葉の様であるが、私はそうは思わない。一旦、職業につけば、全て、その道のプロとして自他共に認められなければならない。

「ベテラン」とか「その道の達人」とかいう表現に云い換えられているが、プロとしての厳しさの追求が必要ではなからうか。

娘が来春大学を卒業する。職につけば新人として雑仕事がまわってくるが、たとえ、それがお茶くみでも職場一のお茶くみになるように云い聞かせてある。

実年を迎え、私の仕事は企業人として利益の追求をプロの感覚でとらえるべく明け暮れしている今日この頃です。

(山田木材 木材部長)



校庭での語らい

日本思想史研究室

第一期生として

山口 賢治

(日本思想史学・人文第一回卒)

学窓を巣立ってから、はや五年が経過しようとしている。現在、長崎県立壱岐高等学校

で教鞭を執っているが、就職当初の自己紹介にはたびたび悩まされた。「大学時代は何を専攻されていたのですか?」「はい、日本思想史研究室におりました」「えっ、日本思想史研究室ですか?」「いいえ、日本思想史です」「ああ、日本死相史ですね。ずいぶん変わった専攻ですね」思想史という領域があまり知られていないため、説明するのも骨が折れた。

現在、高校生に日本史を教えているが、高校の社会科学教師はオールマイティでなければ動まらないことを日々痛感している。私が今までに担当した科目は、日本史・現代社会・政治経済・地理・倫理である。まったく興味もなく、知識もない科目を教えることの難しさを、いやというほど教えられた。と同時に地理にしろ現社にしろ、手をつけてみるとその奥行きが深さ、重要性に改めて気が付き、興味が湧いてくるのもまた実感である。むしろ門外漢の科目ほど、知らず知らずのうちに思想史研究室時代に培った物の見方が非常に役立つことに気付いた次第である。

思えば、学生時代の四年間に蓄積された何かが、現在の私の教師としての人格を支えているように思えてならない。河原での缶ビール片手の自主ゼミや、研究室有志での奈良・大和路への旅など強烈な印象として残っている。とりわけ、山田洗教授のあの独特の口調で、じりじりと責められるが如き演習の時間など最も充実した瞬間であった。

卒業以来、山口に行く機会にめぐまれず、研究室にも顔を出さずじまいだが、遠く玄海灘の離島から母校を見つめる目があることを忘れないでほしい。

(長崎県立壱岐高等学校教諭)

いま山大・山口は

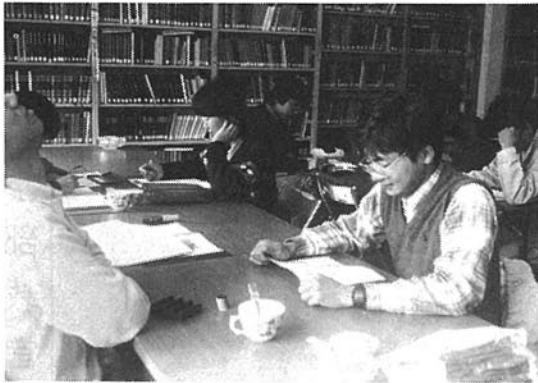
人文学部研究室紹介

哲学・倫理学研究室

人文学部改組によって倫理学講座にも一名スタッフが職員になり、古代から現代にかけて、各国の哲学・倫理学の研究の上で一応の研究指導体制が整備された。同時に学生定員も十八名に増えたが、年に研究室に迎え入れる学生は、七、八名であり、全部で二十四、五名の学生をかかえることになる。我々の研究室だけは相変わらず男性優位であり、それだけにまた女性も貴重な(?)存在となる。

既に御承知のように、創草期の田中晃先生は今尚お元気で、「会報」(第5号)にも、人文学部の呼称に因んで本学部の基本的な在り方に貴重な示唆を与えておられる。増永洋三先生は九大・文学部で活躍され、これまでの研究成果を著書として刊行されたことは御承知のことであろう。また、細川亮一先生も同じく九大で研究教育に精進され、この二年間ドイツに留学され今年帰国された。

現在の教授陣は、哲学では武宮が古代哲学を、松本正男助教授はヘーゲルを中心にドイツ哲学を担当している。倫理学では遠藤教授が主として英・米の思想を、村上勝三助教授はデカルトを中心にフランスの思想を研究指導している。中世哲学の研究は手薄であるが非常勤の先生にお願いしたり、村上助教授を中心に両講座全員の教官が出席する演習等でカバーしている。



研究室での学習

近年特に目立つことは、ハイテク時代に呼応して企業の側から論理的な思考力が求められ、年に求人があることである。就職した学生に対する評価も高く、続けて人を送って行くように要請されるが、学生の反応はいま一つで比較的公務員や大学院に進学を志す者が多い。また卒業生の方にも時々御訪問頂いて、先輩の就職にご配慮頂いているが、必ずしもご要望に応えることができないでいるのが実状である。少し長い目で見守っていただくことを念願したい。

学生が最も苦心しているのは、相変わらず外国語の習得であり、演習・卒論に最大の精力を割いている。しかしよくしたもので、クラブ活動や研究室単位の種々の行事に参加して適当にフラストレーションを発散しているようである。我々もまた少し骨太な人材が育ってくれることを希望し願っている。

(武宮 誦教授)

中国語学・中国文学研究室

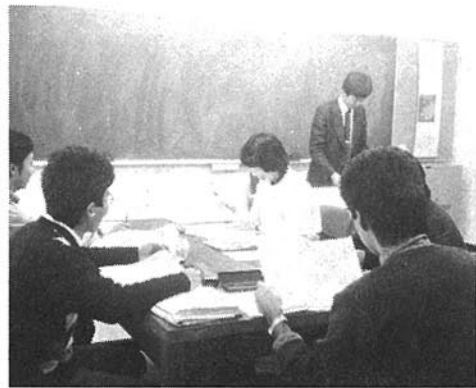
「年々歳々花相似たれど、歳々年々人同じからず」とやら。研究室も、在学生諸君の異動はもとより、研究室の構成にも変化があります。

文学部中国語学中国文学学科目(教官定員二名)は、文学部の人文学部と理学部への発展的改組にともない、人文部語学文学科のうちの中国語学講座(教官定員二名)と中国文学講座(教官定員二名)にやはり発展的に改組されました。

しかし、在学生諸君に対する教育には両講座が共同してあたり、教官・学生共同利用研究室も「中国語学・中国文学研究室」として単一に設置されています。研究室は人文部校舎の五階中央、南向きに位置し、その眺望はみごとです。

昭和五十三年度、人文学部(人文部・語学文学科の二学科)が発足し、人文部第一期学生が入学しました。文学部はその在学生全員の卒業まで人文部に併設という形となりました。

昭和五十五年四月、助教教授福島吉彦は教授に昇任。五十六年四月、中国語学講座と中国文学講座に分離、語学に福島を配置、文学に教授岩城秀夫を配置。同年十月、文学助教教授阿部泰記が就任。五十六年三月、研究室からの文学部中国語学最後の卒業生を送り出し翌五十七年三月、学部としても、研究室としても、最初の人文部卒業生を送り出しました。同じ五十七年三月、文学部廃止。五十七年四月、語学助手に丸尾香葉子が就任。六十年三月、丸尾助手退職。四月、語学助教教授に平田昌司が就任。同じ六十年四月、大学院



研究室での演習

人文科学研究科(修士課程)が発足しました。それにもない、文学専攻科は廃止されました。研究室の教官現員は四名。もと文学部中国語学研究室助手横山永三は、現在本学教養部教授として、中国語を担当しています。

本研究室の文学部中国語学学科期の卒業生は計七十六名(初期の中国語学研究室期の卒業生をすべて含む)、人文部期の卒業生は六十二年三月までで計四十一名、文学専攻科修了生は計六名です。本中国語学・中国文学研究室卒業生諸氏の同窓会が、学部全体の同窓会とは別に、昭和五十八年結成され、同年十月に第一回の、六十年十一月に第二回の会合が催されました。現在第三回会合の企画が立案されつつあります。

現在、研究室の在学生は四年生八名、三年生十一名、二年生十二名です。学生諸君は語学を専攻しても、文学を専攻しても自由で、細分はしていません。大学院の入学生はまだ数年前から、研究室在学生諸君のうちに、

中国の諸大学へ一、二カ月の短期留学、また一カ年の長期留学を行なう者が現われ、目下在学生の間で留学がちょっとしたブームになっています。日本と中国の間に国交がなかったころから考えると、めざましい変化です。

なおまた、山口大学と中国の山東大学との姉妹校提携により、昭和五十八年度福島が、五十九年度阿部が、山東大学で研修を行ないました。本年岩城が一カ月訪中します。

研究室の初代教授青木正児先生は物故されましたが、第二代教授・本学名誉教授上村幸次先生は郷里奈良でたいへん御健勝にお越しです。第三代教授岩城は来六十二年三月停年退官し、四月、新しい教官を迎えます。

広く全国にわたり、各界各所で活躍しておいでの本研究室の全卒業生諸氏に、より一っそうの御多幸をお祈りするとともに、機を得て、山口市吉田なる新しき人文部校舎の、新しき研究室の、はるけき緑の眺望を、ぜひ一度、そして、是非また、楽しまれんことをとお誘い申し上げます。(福島吉彦教授)

「日中学术交流奨励会」への寄附金増額について

「山口大学日中学术交流奨励会」は、中華人民共和国の山東大学と学术交流の成果を納めています。鴻文会も、その一員として寄附金を負担してきました。六月十四日に開かれた鴻文会第七回役員会で山東大学との学术交流では人文部部の果している役割は大きく、寄附金もそれにふさわしく増額していかかという意見が役員の中から提起されました。協議の結果、従来の一口五万円を、二十万円に寄附金の負担を増額することとなりました。

人文学部教官

学部長(併)	八木 充
●人文学科	
哲学	武宮 正男
倫理学	遠藤 徹
中国哲学	村上 勝三
中国思想史	内山 俊彦
日本思想史	山田 和夫
講師	豊澤 一
美学・美術史	石原 達二
国史学	奥津 聖
東洋史学	八木 充
西洋史学	畑地 正憲
考古学	山本 英史
社会学	山口 房司
社会学	近藤 喬一
社会学	中村 友博
社会学	木下 謙治
社会学	小谷 典子
社会学	畠 野 充子

社会心理学	小川 全夫
社会人類学	三隅 一百
●語学文学科	
国語学	関 一雄
国文学	添田 建治郎
中国語学	石井 精一郎
中国語学	福島 吉彦
中国語学	平田 昌司
中国語学	岩城 秀夫
英語学	阿部 泰記
英語学	山本 和之
英語学	鈴木 重樹
英語学	アレキサンダー・ブルース
英語学	和田 敏英
ドイツ語学・ドイツ文学	岡光 一浩
ドイツ語学・フランス文学	工藤 康弘
フランス語学・フランス文学	末松 壽
フランス語学	井上 三朗
言語学	信森 廣光
言語学	平野 尊識

特別寄稿

留日雑感

周一川

(中国山東大学留学生)

私は去年の九月に日本に来て、もうすこしで一年になります。いまに考えてみれば、この一年間の留学は私にとつてとてもいい勉強になりました。

私の専攻は歴史ですが、いまの日本社会のことがわからなければ日本の歴史を本当に理解することができないと思います。だから、私ができるだけチャンスを利用して日本のいろいろなことを理解するために努力しました。

いまでは先生たちと友達のお陰で、ほしい資料がだいたい集まりましたし、普通の会話もできるようなになりました。そして、日本のことがすこし理解できてとてもうれしく思っています。

日本で過した中でまず思ったことは日本のスピードが速いということです。日本の経済発展の速さは中国にいる時から知っていました。



周先生修了式

たがあらゆる場がこんなに速いとは思わなかったです。情報・交通・手紙・電話等の速さ、日本人の動作、話し方、歩き方の早さにびっくりしました。私は日本人と一緒にどこかへ行つた時、走つてついて行つたこともあります。この速さが日本のスピードでしょう。

しかし、このスピードとは全く似合わない部分もあります。それは日本の別れるおじぎです。日本の礼儀はとてもすばらしいと思ひますがおじぎの数がすこし多すぎると思ひます。例えば別れるとき何度も九十度以上のおじぎをしながら、また会いましょう、と言つてもなかなか別れないです。そのときの日本人の姿を見て私はときどき思わず笑つてしまいました。

「日本は自分の文化や特徴をほとんど持つてません」ということを日本人から聞きまし。はじめは私もそう思ひましたが今では違ひます。いろいろな国の文化が日本で混ざり合つてゐるのが日本文化の特徴の一つだと思ひます。日本語は中国の漢字と日本の仮名それに外来語が混ざり合つてますし、建物とか、いろいろな民俗習慣なども和洋折衷です。このように考えれば考えるほどこれは日本の一番ユニークな部分と言えるのではないでしようか。外国の文化などが日本ほど入りやすく溶け込みやすい国はないと思ひます。

また、日本独自のものもあります。日本式の礼儀、国技等ものは日本にしかないものです。この一年間の留学生活の中では山本の先生たち、特に人文学部の先生たちの親切、心の暖かさをいつも感じており、一生忘れません。このところをかりて感謝の気持ちを表わさせていただきます。もしチャンスがあれば山東大学へいらつしやつて下さい。

スウィフト研究の旅

和田敏英

(英米文学・文理第一回卒・会長)

数年前『ガリバー旅行記』論争(開文社出版)という本を書いた縁で、昨秋十月から五カ月ばかりアメリカ、アイルランド、イギリスの三国を訪れた。

アメリカはまずロサンゼルス郊外、ハンティントン図書館。かつての鉄道王H・ハンティントン(一八五〇―一九二七年)が巨万の富を傾けて、約六十七万坪の広大な土地に、図書館のほか美術館や植物園を作ったところ。

ここに収集されたスウィフト関係の原稿やパンフレット、初期刊本や稀観書を目のあたりにする興奮が鎮まるにつれ、テキストの厳密な確定や本文校訂の仕事の重みを感じると実感することになった。

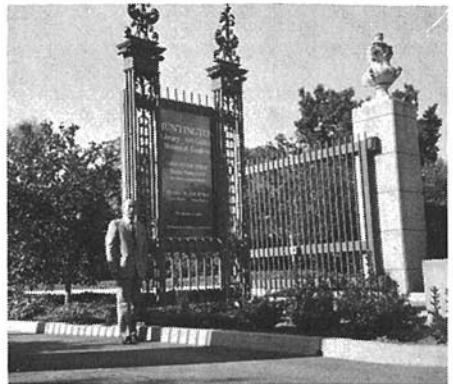
カリフォルニア工科大学のクラブに泊って、毎朝、庭にスプリングラーが回り、シユロの木が茂る南欧風の住宅を眺めながら、この図書館に通ったものである。昔、アメリカ史の渡辺真治名誉教授もここを訪れたとか。

次はアメリカ発祥の地フィラデルフィア、独立宣言に自由の鐘が鳴りひびき、初めて星条旗が織られたところ。ここにはフランクリンゆかりのペンシルバニア大学があつて、この大学のヴァン・ベルト図書館六階の特別読書室で、世界に冠たるテイーリンク・コレクションを手にした。その感激は筆舌に尽くし難い。恩師スカウトン名誉教授はすでにパリ郊外に移られて再会できなかつたが、先生が改訂されたこのコレクションの『書誌』(一九六三年)は名のある図書館なら必ず備えてあるもので、ここがアメリカにおけるスウィフト文献の宝庫といつてもよいだろう。

ここからブリグリム航空の十人乗りぐらゐの小さな飛行機に乗って、港町ニュー・ヘーブンへ向かう。イギリス式に町自体がイエール大学だ。ゴシック建築のスターリング図書館で登録のあと、近代的ビルの稀観書専門パインキ図書館の地下で、故アーサー・ケイラス教授が大英図書館でコピーしたマイクロフィルムを読みふける。特有の字体で克明に記録された「会計出納簿」がその中味、スウィフト人間像がまざまざと再現される想いであつた。

また先の「赤トンボ」に乗ってニューヨークはラガーディア空港へ。さらにケネディ国際空港からダブリンへ渡る。霧が深く、牛や羊が緑の牧場に放されたイギリスの風景、遂にスウィフトの国、ようやくほつとした。出身大学トリニティ(TCD)は一五九二年エリザベス一世の創設で古色蒼然、まさしくスウィフト研究のメッカとなつてもおかしくない。牧師スウィフトの聖パトリック大聖堂、ステラの墓、パネッサの寒村セルブリッジ、

人影まばらな赴任地ララコー、少年時代のキルケニーの街など、スウィフトにまつわる文学散歩をすれば際限がない。この国のウイスキーや黒ビール・ギネスのことは別に書こう。ダブリンの郊外で平均的なサラリーマン家庭に下宿して庶民生活を楽しんだわけだが、とりわけ心暖まるクリスマスのは生涯忘れられないだろう。



ハンティントン図書館入口の著者

もうロンドンのことは書くに及ぶまい。十数年前に通つた大英図書館は普通りなのだか

人文学部の海外学術交流・研究

本学部も、外国人研究者の受け入れ、本学教官の在外学術研究・調査が活発になりました。本年度は、中国から四名の研究者が本学で研究を修められました。海外に研究・調査で出かけた本学教官は七名にもなります。教官ばかりか、学生の海外留学も増えており、海外との学術交流は、今後一層めざましく発展する傾向にあります。今年度の外国人研究者の受け入れ状況と、本学教官の在外学術研究・調査の状況をご報告いたします。

△外国研究員の受け入れ▽

李 慶 祥 男	中国山東大学	国語学(「形容詞」に近い「遠い」に上接する格助詞「に」から「と」を中心に)	60年7月30日
周 一 川 女	国史学(日本近現代史の研究)	60年9月20日	
張 漢 朝 男	国文学(日本近代文学の諸問題及び日本事情について調査・研究)	61年10月23日	
金 中 男	日本文学の研究	61年11月来 来日予定	

△在外研究・調査▽

山本 和之(教授)	米国(スタンフォード大学)	日英語の対照研究	61年2月27日
工藤 康弘(講師)	西ドイツ(ミュンヘン文科大)	初期新高ドイツ語および現代ドイツ文化の研究	61年7月15日
小谷 典子(助教授)	英国(ケンブリッジ大学)	都市社会学理論の研究および資料収集	61年7月23日
鈴木 雅之(助教授)	英国他(ケンブリッジ大学)	ウイリアム・ブレイクと18世紀科学の研究	61年8月2日
岩城 秀夫(教授)	中国(山東大学)	元明演劇に関する故址および文物の調査	61年10月6日
鈴木 満男(教授)	韓国(啓明大学)	日韓両国における文化人類学の学術交流のため	61年10月26日
佐々木 衛(助教授)	中国	近代中国の秘密結社に関する総合的研究	61年12月20日 62年1月23日

(人文学部教授・英米文学)

第五十九回 日本社会学会大会報告

木下謙治

十一月二十三日(日)・二十四日(月)の二日間、山口大学教養部および大学会館を会場として第五十九回日本社会学会大会が開催された。全国各大学、研究機関等から七百四十三名の研究者が集まった。学生や一般の参加者を加えると八百八十二名に達する。昨年、横浜市立大学で開催した第五十八回大会に匹敵する規模になった。人口十二万余りの山口市で、これだけの盛会をみる事ができたのは、大成功と言ふべきであろう。

学長以下大学本部、人文学部、教養部からあたたかいご援助をいただいたことが成功の大きな要因である。ことに、教養部にはご迷惑をおかけした。二百数十本におよぶ研究報告をさばくために、教養部の広範な施設を開放していただいた。学長・人文学部長には、ご多忙中にもかかわらず、開会式や懇親会の席上で歓迎のご挨拶をいただいた。大会運営のための雑多な仕事は、私を責任者とし、教養部の林雅孝教授(昭和三十五年社会学卒)をはじめ、人文学部社会学系(社会学・心理学・社会人類学)教官の積極的な協力のもとにすすめられた。大会開催時に必要とされた労力は莫大のものであったが、八十名余りの人文学部社会学系の学生諸君が献身的に協力してくれた。学園の大イベントに連帯して参加してくれた学生諸君は、その経験を、こんごの学園生活に生かしてくれるものと思ふ。

は、社会学同窓会(竹田守恵会長・第一回卒)のご支援だった。社会学同窓会の物心両面にわたる支えがなかったら、今回の大会は引き受けられなかったと思う。大都市で開催する学会と違つた、宿や交通についても心配しなればならなかった。宿については、幸い社会学卒業生の寺戸玲二氏(昭和三十九年卒)が近畿ツーリスト山口支店長でおられるので、近畿ツーリストのご協力をいただいた。交通については、防長交通のバスを貸り上げる措置も講じた。タクシー会社にも、事前に協力の要請をした。かなりお金がかかったが、大会参加者が予想をはるかにうまわつたために、赤字を出さずにすんだ。この点でも大成功だった。

開催校の責任者ともなると、大会で行われている研究報告を聴くゆとりはない。したがって、大会での研究報告の内容をお伝えすることは困難である。ただ、私が接触した学会理事や、学会の研究活動委員の先生がたは、今大会が、規模においても、研究報告の内容についても、全体として、たいへん成果をあげたことを伝えて下さり、お祝いの言葉を下さった。内容的な面で、一つだけ今回の大会の成果についてふれば、私達開催校の要請で、学会の一部を市民に公開したことだった。第二日目午後の四つのテーマ部会の一つ「高齢化社会の諸問題」がそれである。通算五十九回におよぶ日本社会学会大会の歴史の中で一般市民に、学会の研究報告の場を開放したのは、今回がはじめてである。テーマ自体も、私たち開催校の要望にそつたものだった。山口県下の状況にもフィットするテーマだっただけに、七十名余りの市民の参加が得られ、活発な討論が行われた。

同期会・研究室
同窓会だより

社会学同窓会は、昭和五十三年発足以来、一年ごとに山口で、次の年は福岡や広島といった他地域で、毎年催されています。第九回の今年は、山口のよし屋旅館において、六月七日に行なわれました。先生方は、福岡より近沢先生がおいで下さり、また、今年四月より、社会心理学にいられた三隅先生を加え、山大からは木下先生をはじめ四名の方、計五名の先生方にご出席していただきました。同窓生は、竹田会長をはじめ、二十九名の出席でした。

今回は、在山の方をはじめ、社会学で女性で最初の卒業生である重中さんと砂田さん、遠路では、大阪より来られた方もおられました。また、今年卒業されたばかりの同窓生の方が例年になく、多く出席したというのが今年の特徴の様に思われます。ジェネレーションを超えて、皆さん楽しい一時をすごされたようです。

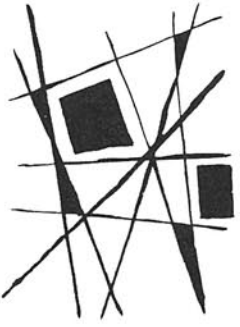
来年は、東京で開かれることになっておりまたひと味違った同窓会になることが期待されます。

国文科同窓会

このところ、我が国文科同窓会は、一年一回のペースを守って総会・懇親会を開いてきている。同窓生同志や恩師との絆の深さを示すものである。昨年は秋穂町の国民宿舎で海老料理に舌鼓を打ち、今年二月二十三日には徳山市に集うことになった。昨年の十七名が今年は十八名、わずかだが一人仲間が多くなった。実質以上に大喜びしてみた。何となく近寄りがあった先輩の方々と、思い切つて「必死に」話し込んだ。疲れは残つたものの、お別れする段になると、「まだ早いのに」と名残り惜しかったのは不思議である。若い人がもつと出席されてにぎわうと、寄り合う楽しみも倍増すること確実。一番の若者が酒井君と私。水本、関先生に教えを受けた卒業生の姿が少なかったのは、お招きした両先生に申し訳なく、寂しいかぎりであった。

(添田建治郎・文理第十七回卒)

(暮野充子・文理第二十九回卒)



昭和60年度事業報告

(昭和61年6月14日・第7回役員会)

- 60. 5. 8 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会(和田会長出席)
- 6. 15 第5回役員会
- 9. 7 第6回役員会
- 11. 2 第2回総会及び懇親会
- 12. 1 「鴻文会名簿1985年版」発行
- 12. 15 「鴻文会会報第5号」発行

昭和60年度収支決算書

収入の部

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
繰越金	5,589,983円	5,589,983円	0円	前年度より繰越金
会費収入	1,400,000	1,380,000	△20,000	5,000円×276
名簿売上収入	0	1,000	1,000	1985年版一冊
雑収入	260,000	433,771	173,771	証券・預金利子、総会・懇親会費ほか
合 計	7,249,983	7,404,754	154,771	

支出の部

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
会 議 費	160,000円	132,624円	27,376円	役員会(60.6.15)18,400円(車代6,000円+茶菓子2,400円) 役員会(60.9.7)14,224円(車代12,000円+茶菓子2,224円) 総会費用100,000円(公開講演謝金80,000円+マンドリン演奏20,000円)
印 刷 費	940,000	1,239,500	△ 299,500	会報印刷作成費(2,500部)136,000円、名簿印刷作成費1,100,000円、総会案内状他印刷費3,500円
郵 送 費	1,162,400	1,198,330	△ 35,930	役員会案内葉書2,160円、名簿作成用切手・郵送料225,700円、名簿会報郵送料((350円×2,152)+740)+753,940円、総会・懇親会案内郵送料205,720円、公開講演案内状4,370円、その他6,440円
寄 付 金 費	50,000	50,000	0	日中学術交流奨励会
謝 金 費	139,000	145,500	△ 6,500	名簿作成用アルバイト38,500円、総会・懇親会用アルバイト48,000円、名簿・会報発送宛名書きアルバイト44,000円、幹事用謝金15,000円
雑 費	33,000	312,730	△ 279,730	文具類28,555円、フィルム・DPE・テープ代11,040円、鴻文会封筒(6,000枚)他60,270円、会費返却金40,000円、懇親会費139,865円、総会記念写真代33,000円
予 備 費	4,765,583	0	4,765,583	
次年度へ繰越金		4,326,070	△ 4,326,070	
合 計	7,249,983	7,404,754	△ 154,771	

昭和61年6月14日監査の結果過誤なく適確に経理されていることを確認します。

監 事 森 田 良 吉 ㊟
行 村 和 男 ㊟

昭和61年度事業計画

- 1. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会(5月23日)
- 2. 第7回役員会(6月14日)
- 3. 「鴻文会会報第6号」発行(61年10月)
- 4. その他

昭和61年度予算

収入の部

科 目	61年度予算額	60年度予算額	比較増減	摘 要
繰越金	4,326,070円	5,589,983円	△ 1,263,913円	
会費収入	1,455,000	1,400,000	55,000	新入生5,000円×191、卒業生5,000×100
雑収入	260,000	260,000	0	証券・預金利子ほか
合 計	6,041,070	7,249,983	△ 1,208,913	

支出の部

科 目	61年度予算額	60年度予算額	比較増減	摘 要
会 議 費	40,000円	160,000円	△ 120,000円	役員会 35,000円 (茶菓子代 4,000円+車代 31,000円) その他 5,000円
印 刷 費	130,000	940,000	△ 810,000	会報印刷作成費(2,600部)130,000円、
郵 送 費	150,000	1,162,400	△ 1,012,400	役員会用葉書 1,500円 会報郵送料 144,000円(60円×2,400) その他 4,500円
寄 付 金 費	100,000	50,000	50,000	日中学術交流奨励会
謝 金 費	70,000	139,000	△ 69,000	会報用アルバイト 40,000円 幹事用等謝金 30,000円
雑 費	20,000	33,000	△ 13,000	会報用写真等 2,000円、文具類 5,000円 その他 13,000円
予 備 費	5,531,070	4,765,583	765,487	
合 計	6,041,070	7,249,983	△ 1,208,913	

昭和六十年 人文文学部卒業生就職状況

卒業生数 一六八人
就職者数 一一八人
大学院進学者数 一四人(六人)

Table with 15 columns: 建設業, 食品工業, 印刷工業, 化学工業, 金属製品, 電気機械器具, その他, 小売, 卸売, 百貨店・スーパー, 信用金庫・信用組合, 保険, 証券・商品取引, 通信業(NTT等), マスコミ, 情報処理業, 広告・観光業, 非営利的団体, 公務員, 国家公務員, 地方公務員, 上記以外のもの, 合計

会費未納の方は至急お納め下さいませ
ようお願いします。
終身会費 五、〇〇〇円
郵便振替口座 下関〇一五九〇二
加入者名 鴻文会

昭和61年度 講座別学生数

61.4.1現在

Table with 15 columns: 人文文学科, 倫理哲学, 中国哲学, 日本思想史, 美術史, 国史, 東洋史, 西洋史, 考古学, 社会心理学, 社会人類学, 語学文学科, 国語学, 国文学, 中国語学, 英語学, 英米文学, ドイツ文学, フランス文学, 言語学, 合計

★会員消息

鴻文会会員諸氏の活躍を紹介する欄を設けたいと思う。今回はその第一回である。
渡壁忠紀氏の「耳」が入賞
中国新聞社主催の「第18回新人登場・芸文作品懸賞募集」に応募した、渡壁氏の小説「耳」が、選考の結果堂々第一席に入賞。昭和61年5月のことである。全文は5月13日付の朝刊1ページ全面に掲載された。渡壁氏は、昭和36年3月に国文学研究室卒業の48歳。現在は

字部中央高校の教諭。同校同人誌「飄」を中心に精力的に創作。市民劇団「字部芸術座」に属して演劇活動にも取り組んでおられる。
「耳」は、
幼児の泣き声が聞こえる。「杉本さん、杉本さん」患者を呼ぶ看護婦の声がする。咽喉治療用の吸入器の蒸気が、シチュー音をたてている。
の書き出しで始まる。中国残留孤児問題をヒントにした短編である。親と子の深いつながり、生の重みを読み取ってみたい。冷酷な別れの記憶を刻まれた子供の側の思いはどんなものか、視点を変えた想像をかきたてられて一気に読んだ。

渡辺和子氏(京都産業大学助教授 第15回卒)
去る6月11日から5日間、イリノイ州で開かれた「第八回全米女性学会」での(女性こそ英米文学の担い手)と題する報告文、昭和61年8月27日(朝日新聞西部版夕刊)の文化欄記事に。
河田一哉氏(岩国商業教諭) 第28回卒
明春4月より2年間、鳴門教育大学大学院に留学内定、評価の問題を研究の由。
後藤純一氏(雇用促進事業団) 第23回卒
かつて国家公務員上級試験にトップの成績で労働省入りした後藤君は、目下イェール大学(経済学部)に二度目の留学中。
村田道晴氏(大島商船高等助教授 第12回卒)
朝日俳壇の山口版などで、時折入選句を見かける。句作に精進中か。副会長の滝本竜也氏(社会学第3回卒)と並んで。

〇訂正 先にお届けいたしました一九八五年版の鴻文会名簿の中に、不手際のため訂正すべき箇所がみつかりました。旧教官名簿の物故者欄から、次の御両人を削除し、左記の通り訂正いたします。
桐谷幸治氏 〇四四一九七七一―二五二二
川崎市多摩区南生田五―二二―三
中田裕二氏 〇六一六五三一―一六二二五
大阪市阿倍野区北畠三―四一―二

*編集後記

御当人に多大のご迷惑をおかけしましたことを、心からお詫び申し上げます。あしからず、ご容赦くださるようお願いいたします。
なお、両先生は、お元気で活躍のごことご連絡をいただきました。
〇「会報」を、卒業生の皆様にお送りいたします。毎年、趣向を変えていい「会報」が発行できるようにと考案のようですが、結局、同じような体裁になつてしまいます。毎年、変りばえのしない拙劣なものをと、ご叱責の方もありがたく存じますが、どうかご海容下さい。
〇その中であって、和田敏英会長は、種々のアイデアを下さって、我々に助船を差し向けて下さいます。今回、人文文学部教官の海外研修、出張と、外国人研究者の訪問研究をまとめてみたのも、その一つです。ご覧いただくようになりますように、近年、人文文学部も、こうした海外との研究・交流が増えています。今のところ、外国人研究者は、中華人民共和国の方に限られていますが、将来、東アジア関係の研究者との広い交流が望まれているところです。
〇今回は、会員の方の近況・通信が二件しか掲載できませんでしたが、原稿の依頼は九月からお願いしているのですが、皆様のご多忙の中、ご無理をお願いしているのが、多くを集めるのがなかなかむづかしいのが現状です。
「会報」の楽しみは、同様の友人たちの近況を知ることにもあります。できるだけ広く、できるだけ多くの方々にお願いするつもりですので、「白羽の矢」が当たった折には、どうか快諾下さいませようお願いします。また、「矢」が当たらなくても、転勤、住所変更、ご結婚等々、様々な機会にふれて、短い通信で結構ですので、ご連絡下さい。年に一度ではあります。近況した近況を交流しあうのも楽しいのではないかと考えております。ご投稿・ご連絡を心からお待ちしております。
〇今年もいよいよ暮れてゆきます。本年もお世話になりました。来年度も、会員の皆様のご健康とご活躍の様子を聞けるのを楽しみにしております。では、よいお年をお迎え下さいますよう、お祈りいたします。
(SASAKI)